

満州における日本文学の状況

西 田 禎 元

—

〈満州〉という呼称は、東三省（遼寧、吉林、黒龍江の三省）全体の総称として使われていたが、語源は清の太祖ヌルハチに代表される民族名に由来する。

満州と日本とのかかわりは、日清戦争（1894～1895年）の頃からであるが、1931年に起こった〈満州事変〉以降の不幸なかかわりを特に満州時代として受けとめているようである。

この1931年から1945年の日本国敗戦までの15年間の日中争乱を、中国では〈十五年戦争〉と称している。

1932年の〈満州国〉建国当時、満州国の人口は約3000万人で、その中の1パーセント弱に当たる約24万人が日本人であったが、8年後の1940年には総人口約4200万人のうち、日本人は約100万人で2パーセントを超えていた。^{（注1）}

その三分の一ほどが〈関東軍〉の兵士だったとはいえ、60万人以上の一般人が、満州の地での日々の生活を営み、そこには自ずと文化的活動も生み出されていったのである。

そうした文化活動の一つとして、詩歌・小

説などの文芸活動も、当然展開されていた筈である。

本稿では、主として満州国時代の日本文学の状況について、少しく考えてみることにしたい。

二

いわゆる〈満州文学〉を検討する際に、川村湊氏の「満州文学の三類型」を参考にしておいた方がよい。^{（注2）}

氏は次のように三分類する。

- ① 満州を旅行し、その印象や感想や取材したことがらを紀行や創作として発表した一群の文学者たち
- ② 満州に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々
- ③ 満州に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本列島に引き揚げて来た人々、およびその家族

これらのうち、①と③の文芸活動は主として日本で行われているので、本稿での中心課題は②ということになる。

それではまず初めに、おもな文芸団体について見ておきたい。

全満州規模の組織としては、次のような団

体が存在した。

(1) 満州文芸年誌刊行会

1932年、『満州文芸年誌』第1巻(178頁、1円20銭)を刊行。会員数37名。

おもな掲載作品は以下のとおりである。

高木恭造の詩「肩章の星」、近衛綺十郎の小説「北満平康里の女」、甲斐水棹子の論文「与謝野晶子論」など。

付録として、「満州文芸運動史」と「満州文芸家名簿」を載せる。

前者には、日露戦争終了時から満州事変までの27年間にわたる文芸活動の状況が記されている。

それによると、初めは俳句や短歌の活動が盛んであったが、1920年代に至って、詩や小説の分野でも、目覚ましい活動が見られるようになったことが説かれている。

詩については、1924年創刊の『亜』による安西冬衛や北川冬彦の活動が紹介されている。この詩誌は3年後の終刊(35号)まで、安西が自宅(大連市桜花台84番地)を発行所として、刊行を続けたのである。

小説については、『黎明』(長春)や『満蒙』(大連)や『新天地』(大連)などの総合雑誌に掲載されるようになった状況が紹介されている。

後者の名簿には会員37名の氏名、住所などが記され、短歌団体の代表的存在である、『合萌』、『アカシヤ』、『満州短歌』の主宰者や同人数などが紹介されている。

なお、余談であるが、大本教の第二代教主〈出口王仁三郎〉氏が、『満州短歌』の同人であったことを付記しておきたい。

(2) 満州文話会

文化文芸に関心ある人たち350名(1939年現在)から成る総合団体である。

会の目的は、①会員相互の連絡親睦を図ること、②満州におけるあらゆる文化活動を助成促進すること、にあった。

新京(現在の長春市)に本部が置かれ、奉天(現在の瀋陽市)・大連・哈爾浜・新京の四都市に支部が置かれた。

活動の内容は、①月例の地域別座談懇談会、②随時開催の文芸講演会、③文化映画の夕、④ラジオ放送、⑤『満州文芸年鑑』の刊行、⑥文芸作品の編集刊行、⑦在満作家の奥地派遣、などである。

それでは、機関誌である『満州文芸年鑑』を見て見よう。

第1輯は1937年10月に「G氏文学賞委員会」から刊行された。

〈評論〉・〈詩〉・〈小説〉の部門から成るが、小説の収録作品は8篇で、その中の6篇は『作文』同人のものである。『作文』については後でふれる。

竹内正一の「友情」は、後に短篇小説集『氷花』に収められる。

第2輯は翌年の12月に「満蒙評論社」から刊行された。

小説部門の収録作品は10篇で、半数が『作文』同人のものである。

第3輯は1939年11月に「満州文話会」から刊行された。

〈概観〉には各ジャンル毎の総説が7篇、〈評論〉には古典文学論や近代作家論を含めた評文14篇、〈随筆〉には12篇、〈詩〉には19篇、〈短歌〉には28人の作品、〈俳句〉に

は7人の作品、〈小説〉には21作の短篇が収録されている。

随筆の筆者に児童文学者の石森延男がいる。彼には童話集『まんちゅりあ』などの著作がある。

詩篇の中に高木恭造の「鴉の窩」があるが、この詩を収めた詩集『鴉の窩』は、第1回「満州文話会賞」を受賞している。

短歌の部門には、各短歌同人結社の主宰者である5人の作品が掲載されている。

小説の部門は、『作文』と『満州浪漫』の同人たちの作品が、半数近くの10篇を占めている。『満州浪漫』についても後でふれる。

ともあれ、『満州文芸年誌』(1932年)の会員37名の状況は、7年後の『満州文芸年鑑』(1939年)で会員350名となり、満州における文芸活動の発展ぶりがうかがわれる。

(3) 満州文芸家協会

政府発表の「芸芸指導要項」の理念を体して、1941年に設立された文芸家の主体的組織であり、活動の拠点を、新京永楽町満州有斐閣の二階に置いた。

委員長には『満州新聞社』の山田清三郎、委員には、逸見猶吉(『満州浪漫』同人)ら11名が任ぜられ、会員には、新京の53名(檀一雄、北村謙次郎、緑川貢ら)、奉天の17名(日向伸夫ら)、哈爾濱の9名、齊齊哈爾の4名、その他の地域12名(本溪居住の高木恭造ら)、更に大連のメンバー13名が〈会友〉として加わっている。

108名(会友を含む)の会員数は「文話会」の三分の一にも及ばない。やはり、文話会の存在は大きかった。

(4) 満州歌友協会

各短歌結社の歌人たち140数名より成る、短歌の総合団体である。活動の拠点は、大連市芝生町にあり、おもな活動の内容は、①年1回の総会、②会員の懇親座談、③研究や作品の発表、などである。

以上の団体は会員制の総合文芸団体であり、これらの団体に所属している人たちの一部は、更に同人誌活動も展開している。

それでは次に、おもな同人結社の活動状況について見てみよう。

三

(5) 作文発行所

〈満州国〉が建国された1932年に生まれた同人結社である。

大連市秀月台に活動拠点を置き、同人誌『作文』を隔月に発行し、同人の作品単行本も随時刊行した。

同人の活動状況の一部を以下に示そう。

青木實(『花筵』)、落合郁郎(詩集『三人集』)、小杉茂樹(詩集『麦の花』)、坂井艶司(詩集『崖っぶちの歌』1939年)、高木恭造(詩集『まろめろ』・『我が鎮魂歌』・『鴉の窩』)、竹内正一(小説集『氷花』1938年・『復活祭』1942年・『哈爾濱入場』1942年)、日向伸夫(小説『第八号転轍器』1939年・詩集『白い絵本』・『辺土旅情』1943年)、古川賢一郎(詩集『老子降誕』・『氷の道』・『貧しき化粧』・『蒙古十月』・『芽柳』)、三宅豊子(歌集『七草』)、吉野治夫(「秋」1939年、『満州作家選集』所収)、大谷武男(雑誌『新天地』での〈文芸時評〉担当)。

彼ら『作文』の同人は、〈満鉄〉関係の機関に勤めていた者が多い。

(6) 満州浪漫

「作文発行所」と並ぶ二大同人結社である。新京大興ビル満日文化協会内に活動拠点を置き、『作文』より遅れること6年、同人誌『満州浪漫』(季刊)を創刊。

「満州浪漫」は保田与重郎の「日本浪漫派」の影響を受けている。〈日本浪漫〉に対する〈満州浪漫〉を開花・実現させようと意図していたに違いない。

中心的存在は川端康成にも評価されていた北村謙次郎であるが、このグループには、檀一雄、逸見猶吉といった本格派の作家・詩人も同人として加わっていたのである。

創刊時の同人9人による〈後記〉は次のように記されている。

われらはいま、いかに生きることにより、内部の豊かさのいや増すかを考へ、そして豊かさの自らなる氾濫の日の来るべきを信ずることに、最も大いなる喜びを知りたいと念願する。詞華集満州浪漫は、ただ一つの試みであるに過ぎない。〈中略〉若し満州浪漫に成長といふごときのあるとすれば、それは卿等自身の成長を意味するものである。卿等とともに、旺んなる満州ルネサンスの思潮に拍手をおくる。

彼らは〈満州における文芸復興〉を読者とともに進めようとしていたのである。

翌年の第2輯から、逸見猶吉ら4人が新たに加わった。

〈同人話〉の幾つかを紹介したい。

第2輯の著作人である長谷川濤の言。

私の信念——作家たるものの行動はたゞ作品するのみ——と。

〈時評的「詩と真実」〉と題した北村謙次郎の言。

大きなロマンの構成は、僕らがこんどこの刊行物を出すにいたった大きな動機の一つであって、そのことではいろいろ考へさせられること多いのであるけれども、〈中略〉このごろ逆に厳正な写実の文学、虚妄の美を避けて自然の流れに沿ふ美の中に没入するやうな行きかたの、かっちりした感じの小説に、久しぶりで郷愁めいた愛著を感ずるやうになってゐる。

〈中略〉そんな意味で、僕は長谷川濤氏の「カムチャッカ紀行」に惹かれたのだった。〈中略〉横田文子氏の〈中略〉「文」の方が、小篇ではあるけれども、遙かにロマン文学の名にふさはしいものである。〈中略〉竹内正一氏は僕の敬愛する作家であったが、小説集「氷花」を得て、その全貌に接することが出来、氏がすでに独自の境地を把握する個性的な作家であることを知った、〈中略〉「友情」のごとき佳作が、早く忘れ去らるべき性質のものでないことを信ずる。

北村の言は、彼自身が言っているように、〈時評的〉内容を含んだものである。『満州浪漫』の精神の確認とともに、同人である長谷川や横田の作品評を試みている。更には、『作文』同人の竹内の作品評に及んでいる。『氷花』や「友情」については、既にふれたとおりである。

第2輯から同人になった大内隆雄の言は次のとおりである。

こゝでの私の仕事は専ら満人作家の作品を翻訳して紹介するといふことにあるで

あらう。〈中略〉さゝやかながらこのやうにして日満支の文化の交流、文化的協同に尽し得たら本望だ。

彼は『芸文誌』（満文での印刷）の参与を務め、『原野』（満人作家小説集）などの翻訳小説集（1939年）を刊行している。三族共和の功勞者であつたと思われる。

『満州浪漫』の第6輯は、1940年11月に〈興亜文化出版社〉（新京慈光胡堂401）から刊行されている。編纂者（著作人）は北村謙次郎で、檀一雄の詩や大内隆雄の戯曲が掲載されている。

また、〈満州浪漫叢書〉として、北村謙次郎編の『僻土残歌』が、1941年に同じ興亜文化出版社から刊行されているが、檀一雄や長谷川濬の作品、更には大内隆雄の翻訳など6篇が収められている。

四

二大同人誌以外の同人結社について概観しておこう。

(7) 文学地帯

活動の拠点は、新京大同大街東光書苑内に置かれ、同人数11名（1939年現在）、機関誌『文学地帯』を隔月に刊行。活動状況の一部は、今村栄治の「同行者」・宍戸貫一郎の「空しき部落」が、『満州文芸年鑑』第3輯に掲載。

(8) 満州文学

活動の拠点を新京大同大街東光書苑内に置く。同人数7名、機関誌『満州文学』は不定期刊。

(9) 撫順文学研究会

活動の拠点を撫順市西公園町市立図書館内

に置く。同人数12名、機関誌『断層』は不定期刊。同人の母里山正夫は、『日本詩壇』の同人でもある。

(10) 鵲

活動の拠点を大連市須磨町52八木橋雄次郎宅に置いた「詩」の同人結社である。同人数8名、リーダーの八木橋は『満州文芸年鑑』第3輯に、〈概観〉として「詩」部門を担当し、〈評論〉として「詩論」、〈詩作〉として「一輪車」を執筆している。機関誌は詩誌『鵲』である。

(11) 二〇三高地

活動の拠点を大連市近江町153-2-1島崎曙海宅に置く。同人数3名、機関誌は詩誌『二〇三高地』（隔月刊）である。

五

次に短歌の同人結社について概観しておく。

(12) 満州短歌会

活動の拠点を大連市柳町3に置く。主宰者は西田猪之輔で同人数23名（1932年現在）、歌誌『合萌』（月刊）を発行。

活動状況の一部を示すと以下のとおりである。

①『合萌年刊歌集』（西田猪之輔編）の刊行〈1930年6月、株式会社日清印刷所〉。

爾靈山坂のなかばに捨て石の名なき碑ありて緋桃花咲く——旅順にて——

②歌集『御空ゆく』（西田猪之輔）の刊行〈1935年3月、大連〉。与謝野寛の序文と、晶子の序歌10首が冒頭に掲載されている。著者自身の歌を1首示そう。

行きずりの我れに礼する支那をとめ今日の心に親しみの湧く

- ③ 歌集『沙金』(西島貞子)の刊行(1930年10月、大連)。与謝野晶子の序歌2首を掲載。著者自身の歌1首

あふれ湯の落ちゆく音のかそけさを一人
ききをり体ふきつつ(一湯崗子温泉
行一)

- ④ 西田猪之輔遺稿集『雲愁ふ』(西田鈴子編)の刊行(1940年6月)。故人の歌1首。

移民村遠きに見えて我が汽車に手を振る
女もんぺいを著く(一国境の旅一)

- (13) あかしや短歌会

活動の拠点を大連市鳴鶴台203に置く。主宰者甲斐雍人宅である。同人数は24名、歌誌『アカシヤ』(月刊)を発行。

活動の状況は以下のとおり。

- ① 歌集『花あかしや』(甲斐操子)の刊行(1924年12月、大連市大阪屋号書店)。

著者は与謝野晶子を崇拜する歌人である。著者の歌を1首示す。

名のために男たてるぞ道のために男たて
るぞ哀しき教育(一哀しき教育一)

- ② 歌集『埴道』(甲斐操子)の刊行(1935年)。

- ③ 歌集『埴道以後』(甲斐操子)の刊行(1940年、大連)。

甲斐操子は「あかしや短歌会」の前身であった「水壺大連支社あかしや会」(1932年現在)の代表者である。

- (14) 満州郷土芸術協会

活動の拠点を、代表者である香川末光宅(大連市大和町26-114)に置く。同人数27名は、1932年当時にあっては最大であった。歌誌『満州短歌』(月刊)を発行。

活動の状況は以下のとおりである。

- ① 歌集『長城を踰ゆ』(八木沼淳雄)の刊行。

- ② 歌集『春廟』(富田充)の刊行。

歌誌の『満州短歌』は『近代文学大辞典』(新潮社)に掲載されている、唯一の『満州短歌雑誌』とってよい。

- (15) 満州歌話会

活動の拠点を哈爾濱河溝街28に置く。主宰者の三井實夫は『創作社』の社友でもあり、歌誌『満州歌人』(月刊)を発行。

おもな同人には、朝原信一郎、鈴木済、津田八重子、平山斌、桃北好澄らがいる。

- (16) 北満歌人社

活動の拠点は、主宰者である相川澤宅(哈爾濱道裡透龍街9)に置かれ、歌誌『北満歌人』(月刊)を発行。

おもな同人には、新井重美・富永幸子らがいる。

- (17) 満州新短歌協会

活動の拠点を、主宰者である川崎陸奥男宅(大連市桃源台116)に置く。機関誌『短歌開拓』を発行。おもな同人には、加藤齡明、佐伯盛美、坂倉輝雄、白井尚子、関川幸一郎、原三千代、藤井千鶴子らがいる。

六

それでは次に俳句の同人結社について見てみよう。

俳句の二大同人結社は(18)「平原俳句会」と(19)「満州俳句会」で、両者とも『新天地』の「文芸創作欄」に、月々の句作を掲載していた。

前者の活動拠点は大連市光風台176に置かれ、句誌『平原』(月刊)を発行。

後者の活動拠点は大連市神明町100に置かれ、句誌『満州』(月刊)を発行。

その他の俳句結社は以下のとおりである。

㉔ 大連俳句会

活動の拠点は大連市青雲台 50 に置かれ、句誌『満州通信俳句』を発行。

㉕ 営口俳句会

主宰者は古川而作で、句誌『白豚』を発行。短歌や俳句の結社は他にも幾つかあるが、ここにはそれらの一部を紹介するにとどめた。〈川柳〉や〈詩吟〉の会が、奉天（現在の瀋陽市）などを中心に活動していたことを付記しておきたい。

以上 17 に及ぶ同人結社を紹介したが、大連を拠点にしたのが 10 団体、以下は新京 3、哈爾浜 2 と続く。

当時いかに大連での文芸活動が盛んであったかがうかがい知れる。中でも、短歌と俳句の活動は、10 団体中 7 団体が大連を拠点にしている。

満州の新都である新京には、総合文芸誌である『満州浪漫』、『満州文学』、『文学地帯』の 3 誌を生んだ 3 団体が活動していたに過ぎないが、充実した内容の『満州浪漫』については上述したとおりである。

なお、同人誌の中で歌誌が最も多いという状況について少しく考えてみたい。

小説が長文の形式であるのに対し、短歌や俳句は短文の形式である。小説はある程度の創作意識がないと書けないが、短歌や俳句は趣味程度の感覚でも作ることができる。

現在でも、小説集を刊行する素人はそう多くないが、歌集や句集となると、人生の節節に刊行する人が結構多いものである。

このように、短歌や俳句は、そう構えずとも創作に参加することが可能である。

ということは、上述の歌誌の同人も、皆が皆玄人の歌人ではなく、異郷でのつれづれを慰めるためにも、最も日本的な文芸様式の和歌（短歌）にかかわったという側面を軽視するわけにはいかないのである。

小説や詩の分野には、北村謙次郎、竹内正一、逸見猶吉、高木恭造といった本格派の文人も存在したが、短歌や俳句の分野には、歌集等の刊行が目立つわりには、本格派の歌人たちは殆ど見当たらない。

満州における文学状況の一つの特色であろう。

七

それでは次に、〈文芸欄〉を有した総合雑誌の状況（1939 年現在）を概観しておこう。

(1) 満州行政 (2) 満蒙 (3) 新天地 (4) 満州評論 (5) 観光東亜 (6) 満州公論 (7) モダン満州 (8) 月刊満州 (9) 健康満州 (10) 協和 (11) 満鮮 (12) 電々 (13) 物資と配給 (14) 北窓 (15) 警友 (16) 満蒙評論 (17) 医科 (18) 日満公論、などが刊行されていたが、18 誌中 14 誌までが大連（7 誌）と新京（7 誌）で、残りの 4 誌が奉天（3 誌）と哈爾浜である。

ここでは、(2)・(3)・(4)の 3 誌のうち、(2)について少しく眺めてみたい。

(2)の『満蒙』は、1920 年 5 月、大連市敷島町 82 大連商工会議所内に置かれた〈満蒙社〉から創刊された総合雑誌である。

「同人覚書」には、活動の内容、目的、会費のことなどが、次のように記されている。

1. 同志相集ひ「満蒙社」を結び、雑誌「満蒙」を刊行す

2. 「満蒙」刊行の目的は学芸の昂揚を中

心として大陸文化を宣布するに在り

3. 満蒙社の事業に賛同し年額金 20 円也
の醸出者を賛助員とし「満蒙」の年極め
継続購読者を誌友とす

別項目に、『満蒙』(月刊)の誌代が、1部
50 銭、年極 5 円と記されている。

1938 年当時の活動の拠点は、大連市紀伊
町 91 満州文化協会に移っており、誌代も 1
部 1 円に値上げされている。

中国吉林省長春市の「吉林省図書館」に所
蔵されている『満蒙』(1938~1943 年、26 冊)
の「満州文学ヴァリエテ」(文芸時評、薊一郎)
からは、当時の〈満州文学〉の状況がうかが
われて興味深い。

〈文芸時評〉を検討する前に、1937 年度の
「総目録」を見てみよう。『満蒙』に掲載さ
れた文芸関係の作品や論文の状況が概観でき
る。

〈和歌〉(13 名)と〈翻訳〉(12 篇)が目立
つ。前者には、『アカシヤ』同人の甲斐操子
(水棹)、『合萌』同人の島田のはぎ、『作文』
同人の三宅豊子などがある。

後者は 12 篇とも『聊齋志異』などの翻訳
で有名な柴田天馬の作品である。

八

それでは〈文芸時評〉を見てみよう。

1939 年 7 月号

北村謙次郎の「餓鬼」(『満州行政』5 月号)
と、織田富夫の「無花実のある家」(『満州公
論』5 月号)を佳作として取り上げ、論評し
ている。

前者についての論評を紹介しよう。

北村氏の作品には昔から屑が無い。この
ことは氏が作家として相当の力量を有っ
てゐることを証明する

薊の評は、『満州日日新聞』の学芸欄に掲
載された長谷川濬(『満州浪漫』同人)の〈文
芸時評〉を受けての評文のようである。

ところで、末尾に記されている感想が興味
深い。上述の長谷川の批評や、『満州行政』
5 月号所載の吉野治夫(『作文』同人)の文
章を引いて、〈満州文学〉が未だ存在しない
こと、発生的混乱状態にあることを認めなが
らも、

まづ作品だ。これならば満州文学と云へ
る、といった作品を書いて呉れたならば、
私をはじめ諸々の満州文学懷疑家の疑問
は雲散霧消しようといふものだ。

と、良質の作品誕生を期待している。

同年 9 月号

福家富士男(『医科』同人、小説集『眠剤』)
の「時計」(『満蒙評論』8 月号)を取り上げ、
興味深く読んだ。プロットにも大体破綻
が無く、佳作である
と評している。

なお、同人誌『医科』は、奉天に拠点を置
いた医学関係のメンバーによって発刊されて
いた。

同年 10 月号

富田壽(『作文』同人)の「任地」(『協和』
9 月号)と、日向伸夫(『作文』同人、詩集
『白い絵本』・小説『第八号転轍器』)の「木の
芽立」(『満蒙』9 月号)を佳作として論評し
ている。

後者については、

創作技術が身についてゐる所為であらう、これなど本当に作品になってゐると云った感じがして、読者は安心を以て読めると記している。

以下、佳作として取り上げられている作品の一部を紹介する。

同年11月号

福家富士男の「劉家房」(『新天地』10月号)、富田壽の「ある旅の記録」(『観光東亜』10月号)、和家治夫の「第二夫人」(『モダン満州』10月号)

同年12月号

日下照(『作文』同人)の「熱帯魚」(『新天地』11月号)、吉野治夫(『作文』同人)の「イワンの家」(『協和』11月号)、町原幸二(『作文』同人)の「駱駝のゐる町」(『協和』11月号)

1940年2月号

吉野治夫の「秋」(『満州浪漫』第4輯)、長谷川濤の「烏爾順河」(『満州浪漫』第4輯)、北尾陽三の「虚脱」(『満州浪漫』第4輯)

これらの三作を論評した末尾に、薊は、批評の禿筆を揮ひはじめてから、今度が一番愉しかったことを特筆大書して置きたい。

と、その喜びを記している。

同年3月号

高木恭造の「風塵」(『作文』41輯)、坂井艶司の「麓」(『満州行政』2月号)

同年5月号

竹内正一の「寧安覚え書」(『作文』42輯)、秋原勝二(『作文』同人)の「膚」(『作文』42輯)、北村謙次郎の「博物教室」(『満州行政』4月号)

同年7月号

武田勝利(『アカシヤ』同人)の「秋」(『満蒙公論』6月号)

同年8月号

前文にあたる総評として、

私は、既に竹内正一、吉野治夫、日向伸夫、北村謙次郎等の数氏が内地で多少とも注目期待されて居り、文芸七月号を見て、今また富田壽氏の「沙草地」(『作文』41輯所載)が文芸推薦作品の候補に挙げたことを知り得て、心から嬉しく思ふ次第である。「廟会」が出たことも結構であり、「モダン満州」が七月号を期して日本内地への進出計画を実行に移したことも当地文芸界の為に喜ばしい事と思ふ

と述べ、佳作評として、宮井一郎(『作文』同人)の「文話会齊々哈爾支部結成」(『満州行政』7月号)と、北村謙次郎の「十六号の娘」(『新天地』7月号)を取り上げている。

総評に関しては、『早稲田文学』や『新潮』にも作品を発表した竹内正一や、日本浪漫派同人でもあり、『春聯』(新潮社)、『北辺慕情記』(大学書房)の作者である北村謙次郎を評価していることは、傾聴すべき論説と言えるよう。

同年9月号

織田富夫の「思春記」(『新天地』8月号)

同年10月号

北村謙次郎の「つひの栖」(『文芸』〈日本〉8月号)、松原一枝の「春還る」(『作文』44輯)、池淵鈴江の「血縁」(『作文』44輯)、三沢留喜の「狂人牧歌」(『満州公論』9月号)

同年11月号

冒頭に、

当地の文芸界には、読者にぐいぐいと迫り、彼の心を捉へて一気に読了させてしまふやうな作品は暁の星のやうに寥々たる有様である。だが〈中略〉万事これからののだ。内地の文芸雑誌にだって読める作品が格別多いと云ふ訳ではないぢやないか、と将来に希望をつなぎ得るのだ。と感想を述べながらも、4篇の佳作を紹介する。

高木恭造の「田舎医者」(『作文』45輯)、中山美之の「裏門退院」(『作文』45輯)、古川賢一郎の「洋燈の下で」(『観光東亜』10月号)、桜井某の「幸福な良人」(『満蒙評論』10月号)

【注】

〈注1〉『満州帝国』(河出書房新社)

〈注2〉『異郷の昭和文学』(岩波新書)

〈注3〉北村謙次郎『春聯』(新潮社、1942年)の序文

九

『満蒙』には、いくつかの興味深い論考も掲載されている。

④ 満州文学の動向及一考察 〈1940年1月号〉

鈴木篁二

⑤ 支那の留学生と日本文学 〈同年7月号〉

近藤春雄

⑥ 「長恨歌」と其の「句題和歌」 〈1943年1月号〉

小此木壮介

④と⑥の著者は、当時大連図書館に勤務していた。⑤の著者は、『中国学芸大事典』の著者としても有名である。

④の評論は、〈満州文学〉の名義や、存在の意義を問い、国家と文学といった、当時としては重要なテーマにも及び、文芸としての芸術性に期待している、興味深い論考である。

⑤と⑥は、学術雑誌などに代表的な研究論文といった体裁である。

これら論考の詳細については、またの機会の検討に譲りたい。

今回は、紙幅の関係で、〈雑誌〉全般については触れることができなかったが、次の機会に、残された雑誌と単行本などの状況について述べたいと思う。

〈注4〉『満州浪漫』第1輯(文祥堂、1938年10月)274頁

〈注5〉『満州浪漫』第2輯(文祥堂、1939年3月)